

十字架につけられる

ルカによる福音 23:1-49

(そのとき、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちは) 立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。ピラトは祭司長たちと群衆に「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らし

めて釈放しよう。」しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。

人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。

そのとき、人々は山に向かっては、

『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、丘に向かっては、『我々を覆ってくれ』と言い始める。

『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見

つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

説教

事実は小説よりも奇なり、世の中の実際の出来事は虚構である小説よりもかえって不思議である。英国の詩人バイロンの言葉だそうです。福音を小説と比べてしまうのはいささか軽率かもしれませんが、受難の様子を福音書で読んでみると四つの福音書が同じようなことを微妙に異なった表現していることに気づきます。プロテスタント教会ではあまりみかけませんが、十字架の道行きという儀礼があります。ピラトによる死刑判決から墓に葬られるまでをの各場面を14のイメー

ジにして会堂内にかざり、そのイメージを元にイエスの受難を追体験するという儀礼です。きょうの朗読箇所は十字架上での死までなので場面 1 から 12 までとなります。続きのシーン 13 で十字架からおろされ、場面 14 で墓に葬られるまでが十字架の道行きの儀礼となっています。この儀礼の 14 の場面は必ずしも福音書から採用されているわけではなく、詩篇やイザヤ書など旧約聖書からの預言などもあわせて構成されています。そういう意味では道行きは事実をベースに構成されたものではなく、信仰者が信仰する内容をベースに構成した受難の追体験儀式です。

儀礼の十字架の道行きは事実そのままではないでしょうが、信仰者にとっては事実以上の重みのある儀礼といえます。じゃ信仰があれば事実はどうでもいいのかといえばそうでもないでしょう。と、ぐだぐだと説明しているのはこのみことばの扱い方に注目したいからです。

〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」〕 人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。ルカ 23:34

〔 〕で括られているには意味があります。これはルカ福音書の原文には記述がなく、後代の付け加えだとの研究成果の反映です。つまり「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」というイエスのことばはルカ福音書原本にはなかった。これはイエスのことばではなく、誰かの作文だという意味でカッコで括られています。

マルコ福音書によれば十字架上のイエスのことばはこうなっています。

三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。マルコ 15:34

わたしの感覚で言えばこの壮絶なことばがイエスのことばだったのだろうな、と思います。信仰は人それぞれなので自分自身で受け止めればよいとおもいます。しかし、ルカ福音書として出回ってしまったこの「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」というみことばは寛容、赦しのことばとしてよい影響もあるのですが、それが裏目にでて世の中に悪い影響を及ぼ

しているともいえます。赦しているようで実は裁いている、寛容なようで実は非寛容、独善的なキリスト教徒のイメージは歴史上もそして現在もあります。このみことばは赦しのことばではなく、裁きのことばとして使用されることがしばしばあります。

受難そして復活という出来事を新鮮な気持ちで受け入れることができますように。
